現代ニュージーランド短編小説集

百々佑利子／ジョン・ホプキンズ 監訳

評論社

現代ニュージーランド短編小説集

百々佑利子／ジョン・ホプキンズ 監訳

評論社

現代ニュージーランド短編小説集

昭和56年4月15日　初版発行　　定価 1,800円

監　訳　百々佑利子
ジョン・ホプキンズ

発行者　竹下晴信

印刷所　三倉印刷
製本所　新宿・加藤製本

発行所　株式会社　評論社
(〒101)東京都千代田区神田神保町2－16
電話代表 (265)1961
振替東京　8－7294

<検印省略>

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。　(A－1)

刊行によせて

「現代ニュージーランド短編小説集」に，一言御挨拶を述べる機会を得られてうれしく思います。

ニュージーランド文学の中でも短編小説は，際立った位置を占めています。というのは，短編小説が小説や詩以上に，ニュージーランドの風景や人々の生きざまの機微を的確に表現し得たジャンルだからです。

キャサリン・マンスフィールドは，むろんニュージーランド短編作家中，最も有名で広く読まれており，彼女の作品は今もあとに続く文学者の鑑です。現代の筆力ある作家たちも短編を手がけています。その何編かが本書に掲載されることでしょう。

ニュージーランドの短編小説が，今回はじめて日本の読者の目にふれることが可能になったのも，偏にニュージーランド文学翻訳刊行会会員の熱意と努力のたまものであり，会員諸氏のたゆみない研鑽と翻訳の技術は心からの賞賛に値すると信じます。私はまた，発行発売元である評論社の御尽力に感謝申しあげるべきだと思います。評論社が本書の刊行を快くお引き受け下さり誠に有難く存じます。今回の試みに財政援助を行ったニュージーランド・ジャパン・エクスチェンジ・プログラムにも感謝しております。

私はこの短編集の出版をきっかけとして，引き続きニュージーランドのすぐれた文学作品が日本の読者に紹介されるよう願っています。

駐日ニュージーランド大使
ロデリック・M・ミラー

R.M. Miller
Ambassador

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

現代ニュージーランド短編小説集――――目次

花を買う客……モーリス・ノエル・ダガン　越智道雄 訳……9
俺たちの家……タマ・ウエラタ　佐藤順子 訳……59
忘れまじ……ニック・カライティアナ　百々佑利子 訳……77
空飛ぶジュリアン……クリスチアン・カールソン・ステッド　宮下嶺夫 訳……87
古い網と新しい網……ロラ・パキ＝ティティ　田中明子 訳……123
トタラの木……ロデリック・フィンレイスン　有満保江 訳……133
通夜……ウィティ・イヒマエラ　百々佑利子 訳……143
目撃者……ヴィンセント・オサリヴァン　宮下嶺夫 訳……159

空と大地の間で……パトリシア・グレイス　大内祥子 訳……189
絹……ジョイ・カウリー　小野木淳子 訳……197
義手と触覚……ケリ・ヒューム　大内祥子 訳……213
父親に払わせる……フランク・サージスン　岡　埜賢 訳……237
草原の店……キャサリン・マンスフィールド　有満保江 訳……245
先住者たち……モーリス・シャドボルト　鋤柄暁子 訳……263
冬の庭……ジャネット・フレイム　鋤柄暁子 訳……297
解説……ジョン・ホプキンズ……305

現代ニュージーランド短編小説集

マオリ……ポリネシア系、ニュージーランド先住民。十四、五世紀にタヒチ島等より移住。マオリ語で「土地の者」の意。

パケハ……マオリ語で「自分たち以外の、或いは我々にまじって住む者」の意。十九世紀半ばから入植したヨーロッパ人をさす。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花を買う客（一九六七）

Maurice Noel Duggan
"An Appetite for Flowers"
Landfall, Caxton Press

精緻な筆力で感能の働きをさぐる作家。ダガンの描く世界は、無関心、裏切り、悲哀で灰色に塗られ、登場人物は、迷い、信仰が無く、悩み多い孤独な性格である。現代ニュージーランドの短編小説が描き出さねばならない最もメランコリーで感覚的な風景を、愛に飢えた人々の日常生活の中から細やかにひろいあげ、的確に描写する。

オークランド（北島）生れ（一九二二―一九七六）。広告代理店に勤めながら、第二次大戦後文筆活動を始めた。短編集に「イマニュエルの土地」（一九五七）、「砂利坑の夏」（一九六五）。アイルランド系ニュージーランド人の狭量で単調で感情を偽る生活や、欲求不満の思春期の少年などが素材。本篇は、「オリアリーの果樹園」（一九七〇）に収められている。

児童文学者としても名高く、『トムじいさんと水の少年』（一九五九）は、海を愛する老船長と幻想的な海の妖精との交流を描くロマンで、エスター・グレン賞を受賞している。

モーリス・ノエル・ダガン
越智道雄訳

花を買う客

ヒルダは賛美歌の響く本通りを歩いていった。街角で通行人に呼びかけている救世軍は、人数もたかが知れていた。風が砂粒や紙切れを吹きとばし、大聖堂〔ウエリントン市中心部にある。英国教会〕の尖塔の向こうの空は緑色を呈している。人通りにつかえてちょっと立ち止まってから、彼女は制服姿の救世軍人たちのあいだをすりぬけ、風に吹きとばされていく彼らの声を背に横断歩道の白い縞のあいだの路面を歩いて通りを横切った。彼女は終始舗道の内側を歩いた。男たちがすばやく彼女の顔、ついで脚へと目を走らせ、すれ違いざまに値踏みをつけて通り過ぎていく。わざわざ見なくても感じで分かる。ちょうどショーウィンドウをわざわざのぞきこまなくても、横目で中の品々が分かるのと同じだ。街路には人通りはあまりない。砂粒まじりの風に向かって、彼女は顔をこころもち伏せて進んでいった。買物袋が腕に重く、菊の花束――ロウボタム氏からの贈り物だ――を包んだ色つきの包装紙が風にガサガサ鳴り、ついには裂けてしまった。ライオンの顔を思わせる花々が、黄色いたてがみをふりたてている。

大聖堂の北では商店の数が減る。彼女は西へ曲がると、〝ジェーコブのはしご〔階段状の狭い通路、ウエリントンは坂の町で、階段状の道路が多い〕〟を昇って、テラス・ストリート〔急な斜面を回るように作られている段道〕へ出た。このあたりはもう暗くなり、彼女の靴音が高々と響いた。砂粒もとばず、ほどよく穏やかになった風に向かって、彼女はやれやれというように顔をあげた。いつものとおり、いまは花も咲いていないのに、椿の枝がのびているわきでちょっとぐずぐずしてから、門へ歩み寄ってそこへはいっていく。

玄関の前の濃い暗がりが、彼女は嫌いだった。なぜだか自分でもよく分からない。夏ですらこの玄関はじめじめして、敷石には黴が生えた。おまけにこの日蔭の元凶になっている木ときたら、いつ切り倒してもおしくないしろものなのだ。とはいっても緑があるとほっとするのは事実だった。そこに居坐っていた猫を、彼女は例によって邪険に追い払った――相手は疥癬病みの名なしの権兵衛、なんの同情もわいてこない。たぶんこの肉の匂いを嗅ぎつけたんだわ。

夜によっては階段の吹き抜けには気のめいることがある。しかし今夜ならどんなに高い所にある戸口にだって全速力で駆けあがっていける。

あの肉屋、四十がらみ、少なく見積もっても四人の子持ちというところだろう。その肉屋が彼女に駆け落ちを持ちかけてきたのだ。ひき肉がまざったおが屑〔掃除し易いようにあらかじめ床にまいてある〕が散らかる床に立つ肉屋を見て、ヒルダはつい笑ってしまったが、相手の気を悪くさせないよう気をつけてはいた。全くなぜ唐突にあんなことを切り出したのだろう、それにしても本気かしら？　しかし相手は肉の極上のところをくれて、二度とその話は口にしなかった。彼女も相手の太い指や分厚い掌に触らないよう気をつけ、肉屋のナイフが大理石のような肉を切り開いていくのを見守っていた。

いま彼女は自分の部屋の鍵を開け、陰気な室内へはいった。ガスと花の匂いが広がる中で、最後の光が消えかけている。ドアの下に手紙が一通つっこんであった。最敬礼をするときのように背筋をしゃきっとのばして屈みこむと、片方のストッキングが伝染病になるのが分かった。手紙は別れた夫のベンからだった。彼女はそれを電話わきのテーブルに置いた。なにも急いで読むことはない。ベンからきたものなら、なんだって急ぐことなんかないわ。おかげでストッキングがパーになっちゃったし。

いま一番したいことは、と彼女は思った。カーテンをひいて、電気をつけ、この琥珀色のたそがれの中

でしばし椅子に腰を落ち着けて、なにか冷たくておいしいもの、百パーセント外国産のエキゾチックな飲みものをすすること。しかし少なくともひと息つく余裕はあったくせに、いや余裕があったからこそ、逆に彼女はやかんの湯がわいているあいだにジャケツをぬいで、買物袋をあけにかかった。すると電話が鳴った。

「ヒルダかい?」

「他にだれがいるってのよ?」彼女は風に乱れた髪に指をつっこみ、きびきびした手つきでかきあげた。彼が電話をよこす時間だった。一分と違わない。彼女が肉屋から駆け落ちの話を持ちかけられたことを告げると、やぼったらしく腹を立てた。万事に几帳面すぎる男だ。当人には子供がいるから、駆け落ちなど思いも及ばない。

「そっちへいってもいいか?」

「いまから? これから晩ごはんの支度するとこなのよ」二人は喧嘩していたのだ。彼女は相手と縁を切ろうとしていた。いま黙っているあいだにも、相手はオーケーが出るのを心持ちにしているわけだが、彼女には呼ぶ気はない。

「じゃあ、まだすねてんのかい?」受話器に口がつかんばかりにして喋っているらしい。声を潜めて話すときの息遣いがこっちに伝わってくる。細君が子供らに食事をさせている隙にこっそりかけてよこす電話なのだ。

「あたし疲れてんのよ」ヒルダがいった。「あす電話してくれない? でなきゃ、いっそ電話なんかよこさないで。隣の部屋にいる奥さんに長距離電話でもかけたげたら」

やかんが音をたて、湯がこぼれだしたので、ヒルダは精いっぱい手をのばして、やっとプラグをつま

み、それをひきぬいた。

「あとでいっちゃいけないかな？」

「しつこいわね、アンソニー。あたし疲れてんのよ。早く寝ちゃいたいんだから」彼のほうは毎日暇だらけだから、こんなことといってもまるでピンとこないだろう。

「十分だけ、いいね？」彼は腹をたてず、その分だけもう自分が勝ったと思いこんでいるわけだ。「一時間かそこいらしてまた電話する。ちょいと急ぎの用ができてね」

たぶん、とヒルダは思った。アンソニー・ジュニアが生の人参を喉につまらせたかなんかしたんでしょ。あの人のいつもの言い訳だわ。ちょいと急ぎの用がか。そう思うと彼女の不満に火がついた――急ぎの用ってのは、いつもあっち側のことばっかしじゃないの。その気になりゃあ待っててもいいけど。いまは待つ気になってるかしら、あたし？　むしろ外出したほうがましだわ。そうよ、外出しちゃおうかしら。これだけうんざりさせられれば、ものを食べても消化しないのははっきりしている。いっそこの飾り気のない質素な部屋、そしてバラのように香る素朴な彼女のもとへ、これまただれか素朴な人物が優しい手にバラの花束を抱えて訪ねてきてくれないものか。しかしそれはあだな望みというものだ。それにフライパンも熱くなっていた。

ラジオでは賑かなファンファーレについでしみでるようなバイオリンの調べを長々とやっていたが、彼女はまるで聞いていず、ただ背景になにかを流しておきたかっただけのことだ。そしてフライパンの肉に塩をふりかけ、じっくりと手をかけて完璧なステーキを焼きあげた。それといっしょに、焼きたての白パンにたっぷりバターをぬって食べながら、夕刊を読んだ。まだ読んでいないベンの手紙が、心の奥に不快な感じでひっかかっている。それでも部屋の片隅の本棚の上に置かれたロウボタムさんの菊は、心を慰め

てくれた。ペーパーバックの推理小説がつまった書棚の上に置かれた黄色い花だけは、すんなり受け入れることができる。手で拳を作ったり、指を鉤爪のように曲げたりできない気の毒なロウボタムさん。彼女に抱く彼の穏やかな欲情も、見当違いなものと分かるだけに、彼女は哀れとは思わなかった。

彼女は天秤座だった。新聞にこう書いてある。

内輪のことで、特に蟹座のパートナーのいる場合は、厄介な時期。腹の立つ場面に出くわしてもにっこり笑って受けとめ、なににせよ口論にはひっぱりこまれないようにするのが最上の策。喧嘩をするには相手が要ることを忘れないこと。星まわりを勘定に入れて、自分が傷つくかもしれない役立たずな関係にはこれっぽっちも信を置かないこと。だいじな色はみかん色。最上の数は一。

彼女の知るかぎり、蟹座のパートナーはいないし、そもそも内輪などというものはなきに等しい。それにみかん色は、彼女には映えない。コーヒーが楽しげに沸騰しているあいだに、彼女はハミングしながらわびしい料理を平らげた。なにしろ最上の数は一なのだ〔ひとり暮しを指す〕。

* * *

玄関の例の暗がりには、なにかが潜んでいるのではないかしら——以前から彼女はそう思っていたのだが、おそらくそれはまさに予感が的中した感じだったろう。この男は卑しげな素肌の上にトップコートを羽織ったきり、心身を消耗させる風に吹きさらしになって、なんとも痛ましい恰好で立っていたのだ。自分のほうで猜疑の念や不安な空想を抱いていると、このような幻覚が生まれてくるといった感じだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com